農村住居の住まい方を通して見た私的な生活行為とその空間

A STUDY ON PRIVATE SPACE AT RURAL HOUSE
BY RESEARCH LIFESTYLE岡部 雅美^{*1}, 伊藤 庸一^{*2}
Masami OKABE and Yoichi ITO

In this paper we will clear up the private space at rural house in which the extended family have lived.
We cleared as follows:

- 1) The child is given private room one grows older, and the child has keeping private room when one grows up to be a fine young man. The other family member have keeping private room. That is to say, there are two cycles that each family member have the private room.
- 2) The couple and old family member have private room. In addition, they have used family room by way of private room. But the private space of child has oneself.
- 3) The family member that has two private rooms know how to use properly each room.
- 4) The each family hope the private space which be done lifestyle on many various.

Keywords: rural house, extended family, living with family, lifestyle,
diversification of private lifestyle, private space

農村住居、通世代家族、同居、住まい方、私的な生活行為の多様性 私的空間

1. 研究の背景と目的 かつて日本では、個人や個室など「個」を主張する考え方はあまりみられなかった。しかし、近代化以降、「個」の概念への関心は高まり、個人や個室といった考え方が尊重されてきた。1989年「すまいの近代化論」^{*1}をテーマとして開催された日本建築学会大会協議会では、近代化における「個人」の確立が家族観や住空間構成に多大な影響を及ぼしたことを指摘している。また、こうした現象は農村住居で行われてきた、個室要求に応じた住居の改築にも表れている^{*2}。

前稿^{*3}では、「個」の概念が主張される中での通世代家族の現代的な住まい方の特徴を生活単位（生活主体）^{*4}と住まい方を通して検討した。その結果、家族一緒に団らんや食事に加えて、核家族単位や夫婦単位で団らんや食事が行われていること、そしてこうした生活単位の重層性が空間構成に影響し、団らんや食事の部屋が重層的に確保されていることを求めた。

「個」は、もともと個人（ひとり）や個性を主張する概念であるが、現代の通世代家族の住まい方の検討から、「個」という考え方は核家族や夫婦などの集合体にもあらわれていることがわかる。つまり、夫婦や核家族などが集合体の「個」を尊重した結果、夫婦や核家族単位で

の団らんや食事が行われ、それぞれの行為に応じて部屋が重層的に確保されてきたと考えられる。このことから、これまでの個室の考え方だけでは生活主体の「個」を充足することはむずかしく、生活主体の私的な生活行為^{*5}を行う私的空間が必要であることが示唆される。

これまでの研究をみると、「個」の概念に関する研究では、西山卯三の「日本のすまいⅡ」^{*6}をはじめ農村住宅の「個室」要求に応じた住宅改善に関する研究が多くみられる。また、大岡敏昭^{*7}は農村の住居には夫婦寝室（ナンド）が確保されていたことを指摘している。また「個」に類似する概念では「私」や「我」があげられる。

「私」に関する研究では西山卯三の「住居論」^{*8}における公私室型研究が最初であろう。西山は住空間を私室と公室にわけて住空間論を展開した。この論を踏まえ、鈴木成文^{*9}が「私室」「公室」について検討し、二公室論を提示している。また、竹下輝和^{*10}は「子供部屋・主寝室」を「私室」とし、公と私の空間領域を人間関係・行為・行動様式から分析、小林秀樹^{*11}は「自ら気に入るように場を飾り、しつらえ、維持を行う」空間を「専有私室」とし、場の領域のしつらえや維持管理を指標として考察している。

^{*1} 日本工業大学建築学科 特別研究員・工修

Postgraduate, Dept. of Architecture, Nippon Institute of Technology, M. Eng.

^{*2} 日本工業大学建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Nippon Institute of Technology, Dr. Eng.

図1 対象住居の間取りと住まい方

「我」に関する研究は持田照夫の「俚態論」^{*12}にみられる。持田が提唱した「我」は「生活自身の自己主張我」を示しており、生活主体の我が主張される生活行為が指標となっている。

以上、これまでの「私」「個」「我」の概念を整理すると、①「私」「個」「我」の概念は一樣でないこと、②「私」は就寝という生活行為を主な指標とする概念、「個」は夫婦に対する子供を指標とする概念、「我」は生活主体の我に応じた生活行為を指標とする概念であったことがわかる。前述したように、近年、家族観が多様となり、加えて住まい方観の多様化が見られる。多様な家族観あるいは住まい方観が波及している今日の私的な生活空間を解明するには、生活主体と生活行為を対応させてとらえなければならないのではないだろうか。

そこで、本稿では農村住居の通世代家族を取り上げ、生活主体別に私的な生活行為を検討し、私的空間は多岐にわたる私的な生活行為を充足すべき空間であること、そして、生活主体は私室を中心に家族共用の部屋に依存するかたちで私的な生活行為を充足していることを明らかにする。

2. 研究の方法 通世代家族の住居での私的空間を解明するには、まず、私的空間がどのように確保・確立されているかをとらえなければならない。そこで、①家族社

会学で家族生活を観察するときに用いられている段階設定法^{*13}を用い、子供の成長に応じて5段階を設定し、私室^{*14}のとられ方を求める。次に②確保・確立された私室での在室時間、および私的な生活行為の行われ方を生活主体別にとらえ、私的空間の構成を検討する。さらに、③年代別に住まい方に対する志向をとらえ、多様な生活行為に対応した私的空間の必要性を求める。

対象地は、通世代家族が多くみられる山形県^{*15}とし、農業従事者が多く、地域固有の住居が多く分布している高島町上和田地区^{*16}を事例地に、地域固有の平面構成をみせる7事例(図1)を取り上げ、間取り採図調査ならびに家族構成、部屋呼称、住まい方、私室のとられ方などに関するヒアリング調査(1992年8月実施)、および上和田地区全戸(77戸)の世帯主と次世代に対するアンケート調査(1992年8月実施)を実施した。

3. 私室のとられ方 子供の成長に着目して、第Ⅰ段階＝結婚～第1子誕生、第Ⅱ段階＝第1子誕生～小学校入学、第Ⅲ段階＝小学校入学～小学校卒業、第Ⅳ段階＝中学校入学～高校卒業、第Ⅴ段階＝高校卒業～結婚の5つの段階を設定し、それぞれの段階での私室のとられ方を親世代(現世帯主の親)、世帯主夫婦、子供(現世帯主の子供)にわけてとらえた(図2)。

まず、第Ⅰ段階は結婚したばかりの現世帯主夫婦と親

●=○：現世帯主夫婦、★(男)☆(女)：親世代、▲(男)△(女)：子供を示す、I～Vは段階を示す

図2 子供の成長段階を通してみた私室のとられ方

世代の段階である。現世帯主夫婦はコザシキ (K1、K2) や2階(K4、K5、K7)、ネドコ(K3)、トリツギ(K6)などに私室をとり、親世代はトリツギ(K3、K5)やナカマ(K6)などに私室を確保している。第Ⅱ段階は子供が生まれ家族が増えた段階である。生まれた子供は親である世帯主夫婦と一緒に就寝する。世帯主夫婦、親世代いずれもこの段階での私室の移動はみられない。第Ⅲ段階は子供が親元から独立し始める段階である。K1ではきょうだい3人が一緒に独立し、2階の部屋に私室をとる。K2ではきょうだい4人でナカマに移動し、私室を確保する。K3ではコザシキにきょうだい2人で移動し、K4では第4子は世帯主夫婦の部屋に残るが、他のきょうだい3人は2階に私室を移動する。K5は第1子がニノマに私室をとり、他のきょうだいは親元に残る。K6では女の子は祖母の部屋に移動し、男の子は独立してひとりで私室をシンシツに

とる。K7ではこの段階で子供が独立し、ニノマとその隣の部屋にそれぞれ私室を確保する。つまり、この段階では、子供は世帯主夫婦の私室から独立し、きょうだいまたはひとりで私室をとるようになる。第Ⅳ段階は子供は異性を意識し始める段階である。K1あるいはK4では私室の移動はみせないが、K2では同性のきょうだいにわかれ、姉妹はニノマに、兄弟はナンドに私室を移動する。K3ではこの段階で第1子がこれまでの部屋を専用の私室とし、第2子が2階に私室を移動する。またK5では第2子が親元を離れ、独立してゼンブに私室を確保する。つまり、この段階では同性のきょうだいにわかれ、それぞれ私室をもつようになるか、または、独立してひとりで私室を確保するようになる。第Ⅴ段階になると、K1、K2、K3、K4では第1子以外の子供が転出し、残った子供は第Ⅳ段階で私室として利用していた部屋をそのまま利用する。

また、K6ではこの段階で残った子供が2階に私室を移動している。K5では子供の転出はみられず、この段階で第3子が親元から独立し、トリツギに私室を確保する。トリツギを私室としていた親世代はイマの近くの部屋に私室を移動させる。つまりこの段階では、それぞれの子供が独立し、転出あるいは私室専用を持続する。そして、私室専用を持続した子供が結婚をすると、第Ⅰ段階に戻る。調査時点ではK6の1事例しかみられないが、K6では子供は結婚すると第Ⅴ段階でひとりで利用していた私室を夫婦の私室として利用する。さらに、子供が生まれ第Ⅱ段階になると、そのまま夫婦の私室で子供と一緒に就寝する。

一方、子供が独立した世帯主夫婦は、いずれの事例も子供の成長に応じて私室を移動することはない。しかし、親世代の他界をきっかけに、K6のように夫婦の私室をトリツギからシンシツに移動したり、K2のように妻がこれまでの夫婦の私室をそのままひとりで利用し、夫がニノマに私室を移動する場合もみられる。

以上をまとめると、①子供は成長するにしたがって、核家族→きょうだい→同性のきょうだい→ひとりという経緯を踏まえ、部屋を移動しながら、私室を確保・確立する。②夫婦は第Ⅲ段階以降、子供の成長に左右されずそのまま私室を利用するが、親世代の他界などが契機となって部屋を移動する場合もある。つまり、私室のとられ方には、子供のサイクルと夫婦のサイクルの2つのサイクルがあり、子供のサイクルと夫婦のサイクルが連動し私室が確保・確立される(図3)。

4. 生活主体別にみる私的空間の構成 私室に在室する時間をみると(図4)*17、8時間が20.4%と多く、次いで14時間(17.6%)、12時間(16.1%)、7時間(15.1%)、9時間(15.1%)が多くみられ、1/3～1/2日も私室に在室していることがわかる。そのあいだどのような生活行為*18を行っているかをアンケート調査結果をもとに整理した(図5)。その結果、くつろぎ(60.9%)、本や新聞を読む(50.1%)、テレビをみる(47.7%)などのくつろぎ行為に加え、友を招く(23.5%)や電話をかける(17.0%)などの家族以外の人との交流、勉強や仕事(21.3%)、食事(17.2%)、非日常的なもてなし行為(誕生会をひらく=2.2%)など、多様な生活行為が行われていることがわかった。

次に私室の使われ方の実態を把握するためヒアリング調査*19で得られたデータを生活主体別に整理し、私的空間の構成と住まい方をとらえた(図6)。

①核家族 核家族で私室をもつ事例はK6の1事例である。K6の核家族は2階の10畳と3畳の2部屋を私室として利用している。私室の使われ方をみると、10畳の部屋で、就寝やくつろぎ、本や新聞を読む、テレビをみる、仕事、団らん、ビールなどを飲む行為を行っている。対して3

●（男）＝○（女）：世帯主夫婦、▲△：世帯主夫婦の子供

図3 私室のとられ方のモデル

図4 私室での在室時間

図5 私室で行われる生活行為

畳の部屋を主として更衣・収納に利用しており、2部屋の使いわけがみられる。なお、友を招くときは家族共用のイマで行い、電話は家族共用の電話を用いている。

②夫婦 1部屋の私室をもつ事例（K1=7.5畳、K3=6畳、K4=7畳、K6=6畳、K7=6畳）では、いずれも世帯主世代、親世代を問わず、就寝、更衣・収納、くつろぎ、本や新聞を読むなどを私室で行う。テレビをみるやお茶を飲む、夫婦の団らんは家族共用のイマ（K1、K3、K4、K5、K6）やダイニング（K7）で行われ、電話は家族共用の電話を利用する。友を招くときは家族共用のイマ（K1、K3、K5、K6）やザシキ（K4、K7）を用いる。仕事は主としてイマなどで行われ、私室で行われることはない。また、夫婦でのもてなし行為は行われていない。つまり、1部屋の私室をもつ夫婦は、部屋の広さにかかわらず、私室を中心にイマやザシキあるいは玄関など家族共用の部屋を利用することで、夫婦の私的な生活行為を充足している。

8畳と3畳の2部屋構成の私室をもつK5の世帯主夫婦は、8畳で就寝や更衣・収納、くつろぎ、本や新聞を読む、テレビをみる、仕事、食事、夫婦の団らんを行い、3畳でくつろぎ、本や新聞を読む、食事などを行っている。友を招くときは家族共用のザシキを利用し、電話は家族共用の電話を用いる。夫婦でのもてなし行為は行われていない。つまり、2部屋の私室をもつ夫婦は、2部屋を使いわけながらも、私室を中心としてザシキや玄関

事例	生活主体	室数	就寝	更衣・収納	くつろぎ	本・新聞	テレビ	友を招く	電話をかける	勉強・仕事	食事	団らん	もてなす
K1	●=○	1	A	A	A	A	C	C	C	C	C	C	----
	▲	2	未調査										
K2	●	1	A	A	A	A	C	C	C	C	C	----	----
	○	1	A	A	A	A	C	C	C	C	C	----	----
	▲	2	A	B	AB	AB	AC	B	C	A	A	----	----
K3	☆	1	A	A	A	A	AC	C	C	C	C	----	----
	●=○	1	A	A	A	AC	C	C	C	C	C	C	----
	▲	1	A	A	A	A	A	C	A	A	A	----	----
	★	1	A	A	AC	AC	C	C	C	----	C	----	----
K4	●=○	1	A	A	AC	AC	C	C	C	C	C	C	----
	▲	1	A	A	A	A	C	A	C	A	A	----	----
	★	1	A	A	AC	AC	C	C	C	C	C	C	----
K5	●=○	2	A	A	ABC	AB	AC	C	C	A	AB	A	----
	△	2	A	A	AB	B	C	B	C	AB	B	B	B
	△	2	A	A	AB	B	C	B	C	AB	B	B	B
	△	2	A	A	AB	B	C	B	C	AB	B	B	B
K6	●=○	1	A	A	A	A	C	C	C	C	C	C	----
	▲=△=□	2	A	B	AC	A	A	C	C	A	A	A	----
	★	1	A	A	AC	A	C	C	C	C	C	----	----
K7	●=○	1	A	A	AC	A	C	C	C	C	C	C	----
	▲	1	A	A	A	A	C	A	C	A	A	----	----
	△	1	A	A	A	A	C	A	C	A	A	----	----

A=私室1、B=私室2（私室が2部屋構成の場合に限る）、C=私室以外の部屋、----=該当なし

図6 生活主体別にみる私的空間での住まい方

などの家族共用の部屋を利用することで夫婦の私的な生活行為を充足している。

③ひとり 1部屋の私室をもつ事例（K2=7.5畳、6畳 K3=10畳、6畳、K4=6畳、10畳、K7=6畳）では世代を問わず、就寝や更衣・収納、くつろぎ、本や新聞を読むを私室で行っている。テレビをみるは、世代にかかわらず私室でみる場合と家族共用のイマでみる場合がある。友を招くや勉強・仕事、お茶を飲むなどについては、親世代あるいは世帯主世代は家族共用の部屋で行う傾向をみせるが、子供は私室で行う。電話は世代をとわず家族共用の電話を用いている。ひとりなので団らんは行われない。また、もてなす行為も行われていない。

2部屋を私室とするひとはすべて子供である（K2=6畳と6畳、K5=6畳と6畳、6畳と6畳、4.5畳と6畳）。K2では2部屋のうち1部屋では、就寝やくつろぎ、本や新聞を読む、テレビをみる、勉強・仕事、お茶を飲むなどを行っており、もう1部屋は更衣・収納、友を招くに主として用いている。電話は家族共用の電話を用いる。また、もてなす行為は行われていない。K5では2部屋のうち1部屋（6畳、6畳、4.5畳）では、就寝や更衣・収納、くつろぎ、勉強を行っている。もう1部屋（6畳）はきょうだいで共用しており、本や新聞を読む、友を招く、食事、もてなし（誕生会）に用いている。テレビは家族共用のイマでみており、電話は家族共用の電話を利用している。

以上より、①核家族では2部屋の私室を使いわけながら、私室を中心に家族共用の部屋を用いて接客を行い、核家族単位の私的な生活行為を充足している。②夫婦の場合、私室が1部屋、2部屋にかかわらず、また、世代をとわず、私室を中心として家族共用の部屋で接客などを行い、夫婦単位の私的な生活行為を充足させる。③ひ

	a	b	c	d	e
同じ住居	●	●	●	●	●
12階独立	●	●	●	●	●
母屋別棟			●		
別居	●	●	●	●	
自由	●	●		●	

同じ住居：同じ住居で助け合う生活、12階独立：母屋の1、2階などある程度独立し、団らんや行事は共同で行う生活、母屋別棟：母屋と別棟など日常生活を独立させ、必要に応じて母屋に集まれる生活、別居：別々に住むが、困ったときすぐ助け合える場所での生活、自由：同居にこだわらない自由な生活、a=65才以上、b=64~50才、c=49~35才、d=34~20才、e=19才以下、□に内接する●を100%とし、●は回答率を示す

図8 通世代家族同居に対する志向

とりのうち世帯主世代や親世代の場合は、夫婦の場合と同様の傾向をみせるが、子供は私室で私的な生活行為を充実させようとする傾向が高く、私的な生活行為のための家族共用の部屋の利用はあまりみられない。また、④2部屋構成の私室をもつ夫婦あるいはひとは2部屋を使いわける傾向が高い。つまり、世代、部屋数、部屋の広さを問わず、子供は私室で私的な生活行為を充足しようとし、親世代や世帯主世代のひとり、あるいは夫婦や核家族は私的空間を家族共用の部屋に依存することで、多岐にわたる私的な生活行為を充足している（図7）。

5. 家族の住志向にみる多様な生活行為に応じた私的空間の必要性 年代別（a=65才以上、b=64~50才、c=49~35才、d=34~20才、e=19才以下）に住志向をとらえ、多様な生活行為に対応した私的空間の必要性をとらえる。

①通世代同居に対する志向（図8） いずれの年代も「同じ住居で助け合いながら生活すべき」（a=45.5%、b=50.0%、c=33.3%、d=46.7%、e=83.8%）、次いで「1・2階である程度独立しながらも団らんや行事などは共同で行える生活がよい」（a=27.3%、b=22.7%、c=33.3%、d=26.7%、e=16.7%）を高く志向しており、通世代同居を高く評価している。

②通世代同居の住まい方志向 通世代家族が同居するときの部屋の使い方について独立したい部屋志向と共用した部屋志向をとらえた。まず前者の独立したい部屋志向

図7 私的空間の確保形態モデル

をみると、a～eいずれの年代も就寝室をあげ、次いでb、c、d、eが接客室、bとcとdが団らん室を志向しており、これまで家族共用の部屋として認識されてきた接客室や団らん室を独立させたいとする志向が高い。このことは、私的空間にも接客や団らんの場が必要であることを示唆する。次に後者の共用したい部屋志向をみると、a～eいずれの年代も食事室、団らん室、玄関をあげており、次いでa、c、d、eが炊事室を、a、b、c、eが便所を、eが行事室をあげている。独立志向の高かった接客、団らん室が共用したい部屋志向にも表れており、団らんや接客の場が複数必要であることをうかがわせる。

以上をまとめると、年代にかかわらず通世代家族の同居志向は高く、食事室や炊事室、浴室、便所、玄関を共用しながら、就寝室は独立させ、接客室や団らん室を家族共用の部屋と専用の部屋、数室もうける住まい方志向がうかがわれる。このことから、私的空間は就寝室にとどまらず接客室や団らん室としての役割が必要であることが示唆される(図9)。

6. まとめ 通世代家族が暮らす農村住居では、①私室は子供のサイクルと夫婦のサイクルが連動し、確保・確立される。②核家族、夫婦あるいはひとりで私室をもつ親世代は、部屋数にかかわらず、私室を中心に家族共用の部屋を私的な生活行為に利用することで、私的な生活行為を充足する。③ひとりで私室を確保する子供は、部屋数にかかわらず家族共用の部屋で私的な生活行為を行わず、私室の中で私的な生活行為を充足する。④2部屋構成の私室をもつ場合は生活主体を問わず、1部屋を主として就寝やくつろぎなどに、もう1部屋で更衣や収納など私室を使いわけける。

	a		b		c		d		e	
	独立	共同	独立	共同	独立	共同	独立	共同	独立	共同
就寝室	○		○		○		○		○	
団らん室	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●
食事室	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●
炊事室	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●
接客室	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●
行事室		●		●		●		●		●
浴室	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●
便所	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●
玄関		●		●		●		●		●

独立：別々にしたい部屋、共同：共用したい部屋、□に内接する●

(○) 100%とし、●(○)でそれぞれの回答率を示す。

図9 通世代家族の住まい方志向

すなわち、これまで私的空間は就寝を主とする専用の部屋としてとらえられてきたが、生活主体のくつろぎや勉強・仕事、団らんや接客、食事など多岐にわたる私的な生活行為に対応すべき空間であることがわかった。子供は1～2部屋の私室で多岐にわたる私的な生活行為を充足するが、夫婦や核家族あるいは親世代は、私室と家族共用の部屋を私的空間とし、多様な私的な生活行為を充足する。

謝辞

末筆ながら、調査にご協力いただきました調査対象の皆さまに心から感謝申し上げます。

参考文献・注

- * 1 日本建築学会建築計画委員会：すまいの近代化論、日本建築学会、1989年
- * 2 岡部雅美、伊藤庸一：伝統的住居における3世代の住み方について、日本建築学会関東支部研究報告集、pp.292～232、1989年、他
- * 3 岡部雅美、伊藤庸一：農村住居における生活単位と住まい方を通してみた通世代家族の住空間、日本建築学会計画系論文No.477、1995年
- * 4 家族社会学では「家族は第一次集団あるいは小集団の適例といわれる。そのうえ、家族は生活共同の単位として、生活の主体、つまり生活体でもある」と定義している。この定義を引用し、住居内で生活行為を行う家族成員の組み合わせを生活主体（前稿では生活単位）と定義した。例えば、核家族単位、夫婦単位など。（森岡清美他：新しい家族社会学、培風社、pp.87、1991年 他）
- * 5 就寝、読書、更衣・収納、勉強・仕事、友の接待・宿泊など個人生活行為に加え、家族共同生活である食事、炊事、団らん、くつろぎ、テレビ、新聞を読む、電話、もてなすを生活主体が私的に行う場合を含め私的な生活行為とする。もてなすは主として生活主体が中心となっていく生活会など、食事は茶やビールを飲むなど軽飲食を示す（林知子他：図説住まいの計画 住まい方から住空間をデザインする、彰国社、pp.16～17、1991年）
- * 6 西山卯三：日本のすまいⅡ、勁草書房、pp.267～292、1976年
- * 7 大岡敏昭：すまいの近代化と家族(2)、日本建築学会大会建築計画協議会、pp.84～86、1989年
- * 8 西山卯三：住居論、勁草書房、pp.550、1996年、
- * 9 鈴木成文：住居における公室計画に関する研究、住宅建築研究所報、(財)新住宅普及会、pp.119～132、1981年
- * 10 竹下輝和：公私室型をめぐる二、三の理論的諸問題について—その1 家族の人間関係と領域構成、—その2 公・私空間の空間概念と行動様式研究、日本建築学会大会学術梗概、pp.59～62、1986年
- * 11 小林秀樹他：領域論による公私文化の研究にむけての方法の検討—住様式の領域論的研究その1、日本建築学会学術梗概、pp.207～208、1988年、小林秀樹他：住宅の平面型と「場の支配」の対応構造—住様式の領域論的研究その2、日本建築学会学術梗概、pp.67～68、1989年
- * 12 持田照夫：他適論—新しい生活科学の提唱、学芸出版、pp.170～171、1986年
- * 13 家族社会学で用いられている研究方法のひとつ。ここでは、第Ⅰ段階＝結婚～第1子誕生、第Ⅱ段階＝第1子誕生～小学校入学、第Ⅲ段階＝小学校入学～小学校卒業、第Ⅳ段階＝中学校入学～高校卒業、第Ⅴ段階＝高校卒業～結婚の5つの段階を設定する（森岡清美他：新しい家族社会学、培風社、pp.64～73、1991年）
- * 14 生活主体（私）が就寝に用いる部屋を私室とした。本稿では夫婦や核家族などの集合体の「個」を、個人の個室と区別するため私室を用いる。
- * 15 山形県は、全国でも高齢者率が高い。その反面、高齢者の単身世帯が少なく、家族構成員の人数も多い（総務庁統計局：国勢調査報告、pp.49、1985年、他）ことから、現在でも通世代家族が比較的多い県と判断した。
- * 16 上和田地区の家族構成は統計（高島町：国勢調査独自集計、1985年）によると、一世代家族＝10.5%、二世代家族＝28.1%、三・四世代家族＝61.4%であり、三・四世代家族が現在でも多くみられる。
- * 17 アンケート「一日のうちで、あなたが自分の部屋にいる時間帯はいつですか。昨日（平日）の一日を記入して下さい」に対する回答（自由記入）
- * 18 アンケート項目「自分の部屋では、就寝以外にどのようなことをしていますか」に対する回答（選択肢を設定）
- * 19 生活主体別に私的な生活行為(*5参照)についてのヒアリング調査

(1995年11月10日原稿受理、1996年4月22日採用決定)